
霧の回廊 弐

伯修佳

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

霧の回廊 弐

【Nコード】

N7178Q

【作者名】

伯修佳

【あらすじ】

王と十七の侯爵が国を治める異国の物語、番外編その弐。

女好きの国王・楠くすのきとその後にして研究しか頭がない無感動博士・玲れい彰しょうがメインの話です。

色んな意味でやや大人向け。

時間的に本編「柳里の華」と「祿遣の奏」の間の出来事です。

起（前書き）

本編を読まなくても、恐らく大丈夫に作ってあると思いますが、気になる場合は「柳里の華」をご覧くださいとよりわかりやすいです。

起

雨は、降り続く。

霧の様に細かい滴が触れる全てのものを潤し、細い川を成して流れてゆく。

季節の変わり目に必ずある、大地に豊穣を約束する恵み。湿った空気は、秋を迎えつつある全ての景色を白く霞ませていた。

男が一人、その木々の間に佇んでいる。

どうやら彼が立っているのは小高い丘らしかった。隆起を成したその場所から、雨曇りの今日でさえ辺り一面は難なく見渡す事が出来る。

眼前には広々とした田畑が遠く広がっていて、晴れていれば未だ青い稲穂が鮮やかに臨めただろう。

しかし男は景観などに留める様子もなく、この場所に来た時から自身の足元を見つめたままだった。

其処には一見見にはわかりにくい程の小さな縦長の石が置かれていた。周囲には色とりどりの美しい花々が、石に寄り添うかの様に敷き詰められている。

雨滴が次々と彼の頬を伝い、顎から首へと滴り落ちた。

もう何刻の間そうしていたものか。身を覆う雨具を持たない身体も髪も既に濡れきって、それでも彼は場を立ち去ろうとしない。茫と霞んだこの憂愁の世界で、そうする事が己の今出来る唯一の償いであるかの様に。

あれからもう、一年か。

彼の中では何一つとして色褪せた記憶は無かった。あまりにも鮮烈な記憶は思い出しには向かず、またそうしてはならない充分な理由があった。今でも脳裏に簡単に蘇る。だから敢えて、この一年の間

彼は悔恨と哀惜の念に責め苛まれて来た。

石は墓石。

遡る事一年前、彼は愛していた女性を喪^{うしな}った。原因は彼のせいではないと誰しもが言う。あれは防ぎようがないものだったと。だが、それが慰めにならないのは自身が一番よくわかっていた。

救う事が出来た。出来たはず、だったから。

「……おまえの本当の名前は何と言ったのだろうか、葉山」

彼は足元の石の下、土の奥深くに眠るかつての恋人の名前を
当時そう呼ばれていた名前を 呼んだ。それしか彼は、彼女の事
を知らなかった。

「ようやくここに帰って来れたな」

生まれがこの付近だったという事も、彼女が亡くなってから初めて知った。しかも本人から直接ではなく、彼女が勤めていた店の女将から聞いたのだった。思えば自分についてほとんど語ろうとはしない女だった。あの世界にいた者は誰もがそうである事を彼はわかってきたから、聞こうともしなかった。

ここなら静かに眠れるだろう。

自分の手に掲げて来た花束を、地に咲く花達を慮^{おもんばか}って少し離れた場所に置く。しゃがんで手を伸ばした。かつてかの人にそうした様に、優しく石肌を撫でる。いかにも高価そうな衣服が泥に汚れるのも構わず、その場に膝をついて、視線を下げて。

雨に濡れた墓石は冷たい。もの言わぬ冷たさが、彼と彼女を、過去と現在を隔てる壁を思わせた。

「皓慧様は今、王宮におられるのか」

時は間もなく夕四刻に差しかかるつかという頃、午前中降り続いた雨も雲と共に去り、西宮の一角臙月殿さづかげつには陽の傾きが長い影を落としている。己が仕える主の問いに、侍女荷葉かようは何に對してか腹立たしげに即答した。

「郊外へお出かけだそうでございます。ここの所外においであそばしてばかりとの事で、夜にはお戻りになる様ですが」

主 王后玲彰れいしやうは侍女の様子を不思議そうに見やって、お茶の代わりを促した。

「そうか。私もあまり長居できないから、もし明日までに戻らなかつたら、来ていたと伝えてくれ」

「今晚お泊まりになられるのでしょうか？」

「一応な」

花のごとき薄く凝った意匠の茶器に、静かに茶を満たすと荷葉はわざとらしく溜息をついた。

「陛下もよくよく時機を逃されるお方です事。せつかく玲彰様が久方振りにお帰りになりましたのに」

「あちらもお忙しい御身なのだから、いた仕方なかるう」

さらりと返って来た答えに、彼女は更に嘆かわしげに首を横に振った。

「貴方様がその様におつとりと構えていらっしゃるから、陛下がしたい放題なのではありませんか？ もう少し、正夫人としての気概を持って頂きませんか？」

乳姉妹の嘆息ぶりにも、玲彰はゆっくりと瞬きをしただけで動じなかった。

「もしかして、荷葉は怒っているのか？」

「怒ってなどおりません。ただ、悔しいのでございます」

「悔しい？」

荷葉はきつと主人に向き直った。

「本来ならば王后と言つものは、女ばかりの西宮を統率管理する権限を与えられているもの。側妾わきよこでさえも、貴女様がその気におなりあそばしさえすれば、手のひらで転がす事が出来ますのに」

「だが、その気にならないのだからどうしようもないな」

茶器を両手に包み込む様に持ちながら、如何にも興味なさそうに彼女は呟いた。

「西宮は皓慧様が管理なさっている。今のところ第二の地位ご后ご妃ういが出てはおらぬが、いずれ御子を成せば誰かがそうなるう。管理はその者にさせれば済む事だ」

「では玲彰様は、他の誰が陛下の御子をお産みになられても全くお気になさらないと?」

「私が産めなければ、そうするしかあるまい」

己が石女イシメなのか、それとも夫に問題があるのか 検査してみなければはつきりと断定する事は出来ない。しかし確率から言って夫に分が悪いとしても、こともあるうに一国の主。世継ぎが「出来ない」では済まされないのである。

彼女も貴族の娘であるからには、それがわからぬほど愚かではないつもりだった。

「そうですね」

荷葉の顔にはどこか挑戦的な表情が浮かんでいた。

「ならば、お耳に入れてもよろしゅうございますね」

何が、と問い返す声はない。ただ向けられた視線を肯定と受け取り いつもの事だったので 彼女は構わず続けた。

「こここの所の陛下は、度重なるご外出の上に、ある場所に行くばかりの品物をお運びあそばしています。口さがない者達は申しております 今度の相手は、子供を連れていらっしゃるらしいと」

「子供?」

「いつもなら、お気に入りの女人には着物や宝飾品などをお贈りになるのに、今回は子供用の衣服や本が多いのだそうで」

「なるほど、それならば合点がいくな」

「だから、でございますよ。いくら女人の気を引きたいとしても、子供の為の物資が多すぎる。まるで、子供を困っているかと思える程です」

玲彰は少しばかり考える素振りを見せてから問い返した。

「本当にそうだとしたら？」

「玲彰様！ 何をおっしゃいます！」

「いや、困うではなくて。ただ単に、故あって子供に援助しているとしたら？ その可能性だって捨てられまい」

荷葉は一瞬言葉を失った後、まじまじと主を見つめ、次いで深々とため息をつくという連続技をやったのけた。

「何かおかしな事でも言ったたろうか」

玲彰の不思議そうな顔に馬鹿にされたという認識は見られない。

「……お言葉ながら、玲彰様は疑うと言う事をしなさ過ぎます」

他人を疑うとは、畢竟その人の情報から主観を以て可能性を推測する事だ。研究するのと大差ないのでは と荷葉などは思うのだが、主人の認識は少し違うらしかつた。

「ではその故とは何故ですか、という話になるのですよ。援助する

必要のある子供とはどんな縁の者か。下世話な話ではありませんが、陛下は過去に市井で好き放題に花を散らした御方。清らかな理由を考える方が難しいというものです」

「……驚いたな」

「そうでしょうとも」

「お前は随分と多弁だったのだな。こんなに長く話すのを見た事がない」

荷葉は脱力の余り言葉を失った。

「荷葉？」

「……後生ですから玲彰様。もう少し危機感を持って下さいませ」

袖で顔を覆って彼女は涙声を出し始めた。実は嘔泣きなのだが、鈍い主人にはこれ位しないと通じないのである。

「危機感などないが……だが、そうだな」

玲彰は少し考える素振りを見せた。

「もし、皓慧様に隠し子がいるというのなら……それは確かに捨ておけまい。世継になる可能性があるのだからな」

荷葉は勢い良く顔を上げた。

「おわかり頂けましたかっ」

ああ、と主人は白い面を縦に振る。

「私は全く研究馬鹿だから、そう言った配慮には疎い。礼を言うよ、荷葉。其方の話、考えておこう」

そう言うつと彼女は茶器を静かに茶卓に置いて、立ち上がった。

「文人の間で本を読んで来る。夕飼が出来たらそちらに運んでくれ」

「はい……かしこまりました」

「ああ、それと」

扉より出ていきざま、首だけを僅かに後ろに巡らせる。

「今の話は私が直接皓慧様に真偽の程を確かめる。だからそれまで箱口令を敷いてくれ。せめて、不確実な内にこれ以上広まるのは避けたい」

「……かしこまりました」

侍女の返事に一つ頷いて、玲彰はしなやかな動作で扉より出ていった。

あれでも以前より、大分わかりやすくなったと思うのだけど……。

明からさまに取り乱したり、恠気を見せて欲しいわけではないが、せめてもう少し感情を表に出せないものかと荷葉は思う。

感情を押し殺しているのに慣れたのか、本当に何も感じないのか。恐らくは後者に近いと長年の経験から読めてしまうから性質たちが悪い。

陛下が玲彰様のああいふ所を受け入れて下さると、もう少し問題は少なかつたかもしれない。

だが果たして、世の中にそんな自虐的な男がいるものだろうか？
玲彰は夫に関心が無いのではない。「見ようとしても見えない」のだ。それがどれ程残酷な事か、嫁していない荷葉でも容易に想像がつく。

関心がないのなら、楠王も諦めがつこう。そうではないから、玲彰は己のわかる範囲で 非常に間違つた範囲で 努力するのだ。

でもまあ、最近のお二人の様子からして、いつのまにやらよりを戻されたのは間違いない。つくづく男女の仲とはわからぬものだこと。

王は結局、持てる者特有の身勝手さゆえに、主と四年前上手くいかなかったのだと思う。何となれば、荷葉は二人のやりとりを間近に見ているのだから。時を経て少しは大人になつたとも言つのだろうか。

「荷葉様。ちよつとよろしいでしょうか」

廊下に控えた侍女の声で我に返る。

いずれにしても当人にしかわからない事、周囲は見守るしかないのだ。侍女頭でもある荷葉に物思いに耽る時間はそうはない。彼女は埒もない推測を振り払って、己のすべき仕事をこなす為に立ち上がり部屋を後にした。

いつからだろう、こんな風になったのは。

文人の間は書物や資料ばかりの読書室である。朧月殿にあってはほとんどをこの部屋で過ごす彼女は、いつもなら凧いだ海のごとき静かであるはずの心が、揺れている事に気づいて少なからず動揺していた。

原因はわかっている。自分は確かに夫の隠し子説に衝撃を受けているのだ。その理由もわからぬままに。

皓慧様が「見える」様になってしまったからか。

不確かな白い世界に、ただ一人鮮やかに佇む他者。それは異物だったけれども、未知の領域として彼女の好奇心を誘う。なので最近では会う度にいろんな発見をするのだ。こんな時には、この人はこんな態度を取るのだ、などと。

発見は楽しいものばかりではなかった。特に今の様に、己の中に馴染みのない奇妙な感覚を呼び起こされる時には。

皓慧様に隠し子がいてもおかしくはない。今まで見つからなかった方が不自然だったのかもしれない。

夫には、結婚前から沢山の側室がいた。それだけではない、一夜限りのものや短期間の付き合いの女性を含めれば、その数はとても数えられるものではなかっただろう。彼女は相手の女達に嫉妬した事は皆無だった。する必要はなかった。夫というものがどういうものかわからなかったからだ。ただ王の妻は世継ぎを作らなければならぬとは、知識としてわかっていた。

相手を独占したいと願うゆえの嫉妬は、相手を欲さない事には始

まらない。見えない相手を欲する様な、玲彰は漠然とした思考を持ち合わせてはいなかった。

何だろう……この感覚は。

いたたまれない様な、それでいて焦りにも似たもの。胸の辺りに重くのしかかる。

皓慧様のお子を、私はどう思うのだろうか。

愛するなんて高等な業が、自分に無理なのはさすがにわかっている。それは今までの人生で実証済みだ。

たとえ、己の血を分けた子でも。

愛されない子供が不幸だという話はよく聞く。では世継ぎである子供はどうなるのだろうか。自分以外の場合はきつと、生母が愛情を注いでいるだろうが、もし

これもまたかつてない事だったが、答えの出ない問いに彼女は途方に暮れた。埒もない思考を追い払って、机の上に積み上げられた書物を手に取るうとする。ふと下敷きになっていた書類に目を留めた。

「……夜まで、『これ』でも考えるか」

坂ノ内の几帳面な字が隙間なく並んだ、研医殿の人員体制についての報告書。尾上の事件があつて以来、各局内は慢性の人手不足状態となっているのだ。

本を読んだ方が、気が紛れる様な気もするが少し迷った後、玲彰は報告書に目を通す事に決めた。どうせ逃げるのなら、少しでも実的な方を選ぼうと。

己が逃避していると理解できる事に、そうしてまた戸惑いながら。

承

最初彼は、幻を見ているのだと思った。

ただでさえ朝からの霧雨で、墓標のある丘一帯は淡く霞んでいる。そんな中に、亡き人を偲んでいるちょうどこの時に、彼女に良く似た人間の姿を見れば彼でなくとも我が目を疑っただろう。

だが幻には歩く力があるらしく、徐々にこちらに近づいて来る。顔がすっかり見える程間近に来た時、ようやく彼は正体を理解して内心苦笑した。

何の為に、人を遣って調べさせたのか。

歳は十を越えたぐらいの、漆黒の髪の少年だった。

身形は決して良くはなく、庶民特有の何度も水を通して擦り切れた服を着ている。それでも明らかに年長の自分を見上げて来る目はきりりと澄んで、顔立ちも清廉としている。秀囲気全てが、驚く程亡き恋人葉山によく似ていた。

不意の邂逅に、彼 楠王はまだ行動を躊躇って立ち尽くしていた。少年の方は全く驚く様子もなく、事も無げに無言の呪縛を破る。

「あなた、姉ちゃんの知り合いか？」

楠王はゆっくりと頷く。

「其方は、葉山の弟なのか」

「誰だ、それ。うちの姉ちゃんはそんな名前じゃねえよ。里峻ってんだぞ」

「……里陵……そうだったのか……」

少年は疑いと非難を込めた眼差しで自称姉の知人を一瞥し、さつさと目の前を横切つて墓の前に跪ひざまづいた。手にしていた傘を墓に立て掛け、供え物を先客である花束の脇に並べる。

無言で両手を合わせると、瞑目めいもくして俯いた。祈り終えた後、再び楠王に向き合う。毅然とした所作に、普段どんな相手でも剛胆である筈の彼が　目に見えてたじろいだ。

「済まなかった　私はその、彼女の名前を……通称でしか知らなかったもので」

葉山の遺体をここに埋葬する時、彼は同時に家族にも知らせて簡素ながら葬儀を行った。事件の解明に追われており、身分も手伝つて公にその時自らが出向く事は叶わなかった。使いの者にも口止めしているから、恐らくは遺族は姉の死の理由を知らない。それでももし出会ったら、必ず　謝ろうと思っていた。

たとえ真相を話せなくとも。
今日会ったばかりの子供に頭を下げる男を、少年は怪訝そうに見ている。

「……ま、お客ならしょうがないよね。色街つていうのは、そういう所なんだろ？」

侮蔑というよりは、ただ単純なる問いかけに聞こえた。淡々としている。

「聞いて　？」

「姉ちゃんから、食べ物とか折々に送ってもらってた時にさ。手紙

が必ず付いていて。書いてあったよ、お客の中に好きになった人がいるって。あんただろ？」

楠王はすぐには答える事が出来なかった。

「身分の高いお人だから、余程のことをしない限り、叶わないだろうとも書いてあったけど。……でも、嬉しそうだったよ」

再び視線を墓に戻して、少年は立ち上がった。

「姉ちゃん、近々身請けされてその人の所に行くって言ってた。自分は狡い……とか、よくわからない事書いてあったけど。何かやったのかな。あんたは意味わかる？」

「……いや」

本当にわからなかった。狡猾だったのは自分の方ではないか。

「身請けしようとしたのは……確かに私だが」

答えるのには勇気が要った。勁い眼差しに責められるのが恐かったのではない。何気ない言葉の後ろに、少年の姉に対する愛情と悲嘆が見え隠れするからだ。

「姉ちゃんが亡くなってから、食べ物や着る物なんかを送ってくれたのはあんたか」

「ああ」

「時間あるか？ もしあるのなら、家に来なよ。貴族様が、お忍び

にしてもそんなずぶ濡れで帰ったらお供の人に心配されるだろ。風邪も引くだろうしな」

言つが早いが、踵かかとを返して歩き出す。考えあぐねて動けないでいる楠王に、首だけ振り返って問いかけた。

「どうすんだ、来るのか、来ないのか」

「あ、ああ。行くよ」

彼は離れた場所に静かに止まっている馬車に向かって目配せをした。

心配も何も、「自分がどうあっても声を掛けるまで放っておけ」と命じてある供の者達は、さぞかし馬車の中でやきもきしているに違いない。宿め役の鷹信も連れてきていない事だし。

だが今は、もう少しだけ 亡き人の面影を偲んでいたかった。

少年の姿は、早くもぼんやりと遠ざかりつつある。慌てて楠王は後を追った。

丘を下って元来た方角とは別の道に入りしばらく歩くと、やがて田畑に囲まれた小さな集落に辿り着いた。

近くを流れる川から水路を引いてあるなど、小規模ながら整備された邑むす。収穫を迎えてたわわに実る農作物と、取り囲む豊かな自然の緑。霧雨に閉じ込められ、ひっそりと静まり返っている。

「ここが俺達の家だ。むさ苦しい場所だけど、雨除け位にはなる」

集落の外れにある小さな茅葺かやぶきの家の前に立ち、少年は引き戸を開

けた。

黴かびと土埃の匂いに混じって、何とも生臭い蒸気が漂っている。正面の突き当たりにある雨戸が開けてあるにも関わらず、建物の中は暗かった。

「大兄ちゃん！ おかえりっ」

ぱたぱたと忙しない足音が聞こえて、薄暗闇の奥から背の低い影がこちらに向かって来る。鈴の音にも似た声は少女のものに思えた。

「ただいま」

「小兄ちゃんがお隣の小母さんからくろく米を貰ってきたって。今、火を起こしてるよ」

少年は家の右側に顔を巡らせて「焦がさない様に気をつけるよ」と声を掛けた。

暗闇に目が慣れて初めて、楠王は家の中にかまど竈がある事に気づいた。生臭い匂いはどうやら、もう一人の少年が米を蒸しているかららしい。そこから一際強い臭気が上がっている。

土を固めて床にした細長い空間は土間にしても狭く、すぐ隣に畳敷きの居間がある。ぐるりと見渡しただけで様子が全て観察出来てしまう、二間程度の家だった。隣の間は板戸で仕切られていたが、少しだけ開いた隙間から年季の入った簡素な寝台が見えた。

「突っ立っていないで、上がったら」

初めて間近に見る農民の暮らしに呆然としていた楠王は、少年の冷やかな声音にふと我に返る。

慌てて沓くつを脱いで居間に足を載せた。

「失礼致します」

彼の背後から戸を開けて、水色の官服の青年が両手に大きな木箱を抱えて入って来た。

「こちらに置いてよろしいでしょうか」

ああ、と楠王は頷く。青年の後からもう一人同じ格好をした男が現れ、同様に木箱を置いて行く。二つの木箱は土間を塞ぐ程の大きさがあつた。

「ご苦労だつた。車で待つていてくれ」

二人は彼に向かって一礼し、静かに出て行く。

「何だよ、それ」

首を室内に戻すと、不愉快そうな少年の視線にぶつかった。

「お前の姉さんへの供物だと思つてくれ。雨では墓に置くわけにも行くまい。勿体無い事をすれば、姉さんも悲しむだろうからな」

少年は答えなかつた。ただ与えると言えば激昂するであろう事は、如何な楠王でも予想がつく。

ただでさえ、あの矜持高い葉山の弟なのだ。

彼は構わず部屋の中を歩いて、寝台が覗く隣へと向かつた。

「おい、ちょっと待てよ。そっちは」

「……やはり血は争えないな。私が送った本はどうだった？」

部屋に近づくとつれ、寝台の脇に積み上げられた本が目に入った。そう近づかずとも、擦り切れた背表紙や表紙が読み込まれたものである事がわかる。

少年は先に部屋に入って、ほどなく手拭を何枚も持って出て来た。楠王に内の一枚を差し出す。

「あれは姉ちゃん置いていったものだ。近くの町からたまに本売りの行商がやってくる。……あんたからもらったやつも、面白そうだったから寝る前に少しずつ読んだよ」

「……本を、見せてもらってもいいか」

「別に構わないけど。散らかさないでくれよ」

楠王は頭と身体を一通り拭いた後、手拭を首に掛けたまま部屋の板戸を引き開けた。

居間の半分の大きさだろうか。隅に寝台が縦に置かれ、布団が敷かれている。ちょうど足元に当たる場所にあった本の一番上のものを、手に取った。

「これは……『伝史賦』^{でんしふ}ではないか。里峻ならともかく、本当に其方が？」

伝史賦は二百年程前に書かれたと言われる、史学者の研究書だ。教養高きを求められる太夫に上り詰めた葉山ならば、読んでいても訝しくはない。

だが、研医殿でも専門家しか読まない様な難書である。こんな子供が読めるとはとても思えなかった。

「茶王の御世は早潦甚だ多し、疫痢にて民悉く病む」

朗々と読み上げる高い声。

楠王が振り返ると少年は薄く笑った。

「王、是を憂いて遍く臣を調遣すれども、勢い留まるを知らず……だろ」

「其方……」

「史賦は結構好きだ。昔の文化や出来事が面白いよ」

驚嘆に目を瞪る彼には目を遣らず、少年は竈の火を見守る弟に向かって「莫迦、火はもう少し小さくしろって！」と叫んだ。

その日朧月殿に遅まきながらようやく灯火が上がった夜更け、楠王は二週間振りの妻との逢瀬に間に合う事が出来た。外出より戻った時に報せを受け、王宮で滞っていた政務を片付けたその足で、すぐさま殿に向かう。

出迎えた彼女は僅かに驚いた様子を見せた。

「どつなさったのですか。随分と……お疲れになっていらっしやる様子」

彼はそれには答えず、部屋に入るとすぐさま妻を抱き締めた。

「皓慧様？」

「……しばらく、このままでいさせてくれ」

自身の首筋に凭れ掛かる夫の頭。その先にある表情は見えない。だがこれも観察出来るようになった賜物か、玲彰は何とはなしに彼の背中に腕を回して慰める様にゆっくりと軽く叩いた。妻の仕草に、思わず彼の口から言葉がこぼれる。

「会いたかった」

耳元に低く響く声。玲彰は目を見開いた。

この 身体を通り抜ける、気が遠くなりそうな震えは何なのだろう。

理性をかき集めて出された声は、思ったよりも穏やかだった。

「この所、働き詰めと伺いましたが。良く休めていないのではありませんか」

楠王は苦笑する。

「全く、仕事なんてつくづく真剣にやるものではないと思ったよ。隅々まで片付けたと安心すれば、また山のようにやって来ると来た。近頃では私の執務机は書類で常に埋もれている。おかげで毎夜、熟睡して朝まで気づかない」

「来月の、予算についての諮問会しもんかいに向けて各府も動き始めているのですね」

彼は妻から身を剥がすと、部屋の奥にある寝台に腰掛けてぼやいた。

「おまけに今年から法改正を行う事もあるしな。加えて研医殿の人員編成案だ。箕浦候も笑ってばかりいないでもう少し手を貸して欲しいものだ。鷹信もだが」

「父にそう、伝えておきます」

生真面目に玲彰がそう答えると、また苦笑を浮かべる。

「……まあそれはいいとして」

不意に表情を改めて、右手を妻に向かって伸ばした。

「こっちへ来てくれ」

それは以前、まだ楠王が彼女の許へ通い通しもとだった頃と同じ様な誘い文句。

違うのは、命令形でなくなった事だった。

些細な駆け引きに気づく玲彰ではなかったが、素直に近寄るとそのまま腕を取られ寝台に引きずり込まれた。

最初の内、優しくかった口付けはすぐさま深く激しくなっていく。

「貴方は……疲れを癒さなければ……」

合間によつやく彼女は呟く。それすらもまた塞がれ黙らされた。

「だから今、そうしているじゃないか」

唇を離して笑い、楠王は妻の首筋に顔を埋めた。耳たぶから頬、鼻筋に戻って、そこから下へと。片手で服を脱がしながら、滑らかな肌を愛おしむ様に口付け、指で愛撫する。
身体はそれほど無感動ではないと、荒くなってゆく吐息に反応を確かめる。

「 皓慧様 」

もはや言葉は必要ないのかもしれない。けれどどうしても言いたくなって、虚ろな瞳のまま彼女は搾り出す様に囁いた。

「 私も……多分お会いしたかったのだと、思います 」

楠王の動きが一瞬止まった。

直後、更に激しく貪欲なそれに変わる。

甘い言葉など、当たり前前に他の女からは聞いていた。

それでも自分に関心を示さなかった妻からは、決して与えられる事はないと諦めていたのだ。

渴望を自覚して、己がどれだけこの言葉を欲していたのか気づく。火の点いた衝動に疲れももの思いも全て忘れて、我を失いその白い肌を求めた。最後にはお互いの熱だけが残る、今はそれだけいいと思いいながら

承（後書き）

脚注：早潦 日照りと水害の事を言います。

転

「実はその……一つお聞きしたい事がございます」

胸から下を掛け布で隠した姿で、玲彰は半身を起こし夫の顔を覗き込んだ。

「何だ？」

寝台に身体を縦に起こして肩肘を付いた姿勢で、楠王は彼女の姿を賞賛の眼差しで見つめる。汗に湿って寝乱れた髪が褐色に輝く滝となつて、しなやかな身体の曲線に流れていた。

美しいのは間違いないのだが、こんな時でさえも、女特有の生生きさがあまりないのは歓迎すべきなのか、悲しむべきなのか。それは未だにわからない。

「今、西宮で 皓慧様の外出先について、ある噂が広まっています」

「外出先？ 何でそんな。今までもあちこち出かけているだろうに」

玲彰は少し躊躇いを見せた後、思い切った様に正面から夫を見つめた。嫌な予感に彼は眉をひそめる。

「それで、どんな噂なんだ」

「国王陛下にはご落胤らくいんが外にあり、援助なさっているのではないかという噂です」

「はあ？」

全くの予想外な内容に、思わず間の抜けた声を上げてしまった。一体どこがどうなったら、そんな話になるのだろうか。

「本当ですか」

あくまで真剣な玲彰の顔に、ふと悪戯心が沸き起こる。起き上がり、その白い顎に指をかけて顔を寄せた。

「……もしそうだとしたら、其方どう思う」

夫が妻にする態度としては身勝手な話だが、嫉妬の面では玲彰は普通の女とはかけ離れている。実は今まで、恪気という点では彼ばかりが振り回されて来た。一度でいいから、立場を逆転させてみたい。ちよっとした冒険を試してみる。

「即刻王宮にお迎えすべきです」

全くの変化なし。即答だった。

「もし母親の身分が低いというのなら、私の養子にしてはいかがでしょう。皓慧様の跡継ぎになりうる御子です、まさかこのままにはしておきますまい」

楠王は憮然としてそっぽを向いた。横たわり、目を閉じて大人気なくふて寝を決め込む。

顔を背けた夫に覆いかぶさる様に顔を覗き込んで玲彰は続けた。

「それで、御子は男女どちらですか」

「……やっぱり、そんな辺りは変わらないな……」

溜息混じりに呟いて、ふと自嘲する。

今まで女の嫉妬には散々手を焼いて来たし、どんなに寵愛した相手でもそういつた態度は鬱陶うつとうしいの一言に尽きた。これはその報いなのかもしれない。

いつその事、本当に隠し子でもいれば良かったのかもしれないとさえ思ってしまう。

「皓慧様。国事に関わる重大事項ですから、もう少し真剣に聞いていただかないと」

ああ、ほら。雲行きが怪しくなってきた。

「嘘、だよ」

仕方なく誤解を解く事にする。

「え？」

「落胤なんかいないさ。噂は全くの出任せ。確かに子供に援助をしてはいたけどな。私の子じゃない」

澁々真相を告げようと目を開けた彼は、妻の顔を見て驚いた。

呆然、というのはこういう表情を言うのだろうか。それがこの顔に浮かぶとは思わなかった。

「そ　それでは、一体　誰の」

「……何で其方が慌てているんだ？」

玲彰は困惑しているらしく、拳を額に当てて考え込んでいる。

「そ、そうですね　てつきり、そうだとばかり思っただけ準備してきたもので。まさか違うとは」

「準備って、もしかすると……心のか？」

「はあ、そんな所です」

楠王は破顔した。

一体、この女はどこまで不器用で融通が利かないのだろう。

不器用。

「そうか、そうだったのか」

「皓慧様？」

さつきから不機嫌になったり急に機嫌良くなったりと、めまぐるしく表情を変える夫に玲彰は首を傾げた。

どうにも自分の感情の整理も付かず、とりあえず追いやって話を進める。

「それでその、お世話しているという子供は……一体どういづこ関係なのですか」

「ん？　ああ、子供か」

妻の肩に顎を乗せながら、機嫌良く楠王は答えた。

「臯乃街で亡くなった、葉山の弟だ」

返答までには、一瞬の間があつた。

「然様うらなですか。確かに、身寄りがいっても訝おかしくはありませんが。では、後見されるおつもりなのですね」

「ああ。いずれは王宮に引き取り、どこぞの貴族の養子にでもして侍従官にさせてやりたいと思つてな」

柔らかい呟きが彼女の肩肌を震わせる。

玲彰は自分が困惑している事に気づいていた。

これは「嫉妬」と呼ばれるものなのだろうか？

心が波立つてはいるが不快というほどでもない。ただ混沌とした感情が胸を満たしている。

「聞けばふた親は既に病で亡くしているそうだ。彼の下には更に弟妹が一人ずついて、葉山が仕送り出来なくなつた今、親が残した畑を細々と耕したり近所の手伝いをしたりして暮らしを立てているとか……子供の稼ぎでは、とても家族を養えるものではないだろう」

「そうですね。また苦界に身を沈める子供を作ってしまう事にもなりかねません。援助はすべきでしょう。ただ」

「ただ？」

「王宮に引き取らずとも、せめて王都に働き口を世話する方が筋かと私は思います。ここに置けば、いずれは姉の死の理由を知るでし

よう。そうならばきっと」

己の想像力でなく、一般的な知識から出す結論に彼女は目を伏せた。

此処でもまた、霧に包まれた世界は何も映し出さない。

「悲しみが増すではありませんか」

楠王は顔を上げ、何も言わず妻を鋭い眼差しで一瞥した。

「……知られても良い、と私は思っているのだが」

見られた方は、常でない暗い表情に内心の驚きを押し隠して答える。

「本人の為にならないのでは、と申し上げているのです」

「そうだな……」

彼はまた玲彰の肩に身体を預けた。

「私 গতাদ、楽になりたいだけなのかもしれない。憎まれた方が、いつそすつきりすると思えるのだ」

世継ぎでもない。夫の愛した女性の血を引くにしても、西宮に引き取るでもない少年だという。

玲彰は胸のざわめきの理由を何とか解明しようとして気づいた対処法がわからない、それを人は「混乱」と呼ぶのだと。

「憎まれたいのですか？」

問う声には、何の感情も籠っていない。

否、籠められなかった。

愛情を理解出来ない、憎しみも「相手を傷つけたいと願う負の感情」という言葉の意味以外に答えを知らない。

ただ、導き出されるのは誰しも進んで傷つけられたいとは思わな
いだろうという結論だった。なのに夫は願うという不思議。

妻のそんな心理など気づかない楠王は、問いかけを違う風に解釈
したらしかった。

「くよくよといつまでも泣かれる位なら、憎まれた方が増した」

玲彰はもう何も言えずに、黙って楠王の背中を宥める様にさすっ
ていた。愛する者の死に涙を流せる 自分にとっては、全く手の
届かない感情。

「今日は其方、随分と優しいな」

笑い含みな囁きが聞こえた。楠王はいつの間にか再び妻の身体に
腕を回している。

肌を撫でられる感覚に身を委ねながら、彼女はそうだろうかと内
心首を傾げるのだった。

「では陛下は、その少年を東宮に引き取るうとなさっていたのです
か？」

数日後朧月殿にて起居した折に荷葉にその事を話すと、例によつ
て朝の茶を煎れながらも、彼女は眉をひそめて怪訝そうにしていた。

「ああ。とりあえず本人も『世話をしたい』という申し出には了承したそう。私も考えたのだが……聞けば、なかなか利発な少年だそう。『伝史賦』を諳^{そら}んじる子供など、滅多にいないだろう」

「まさか、玲彰様。ご自分が養子になさるなんて仰ったのではありませんよね？」

「言った。実は今日、昼過ぎに屋敷に迎え入れる予定なんだ。今十歳だそうだから、成年の十六になるまでは家族ともども面倒を見ようと、おいおい話をするつもりでいる」

そんなわけで暫くは箕浦の実家で寝泊りするぞ、と言った主に侍女は溜息をついた。

「こちらに寄り付かないのはいつもの事ですから構いませんが。よく侯爵様が許可なさいましたね」

「皓慧様が世話をして風聞になるよりは、と父上もお考えになったらしい。あの子供達は事件の被害者だからな」

「陛下の『配慮』のせいで姉を亡くしたのですものね。確かに不憫ではありません……」

一年前に西宮内を震撼させた宮女毒殺事件は、荷葉達侍女にとっても忘れられないものであった。故に言葉に棘が含まれてしま

う。
国王陛下の身代わりになって毒を呷^{あお}ったその女性は、当時彼がたまたま寵愛していた者の一人だった。

毒が入っていた器を間違えて口にしたと、公式には発表されてい

る。

事態を憂慮した楠王は、犯人が研医殿にいと踏んでおびき出す為、に世間と隔絶された場所　遊女達が棲まう、かの街へ足を運んだ。

少年の姉、葉山はその遊女の一人だった。

王に気に入られたが為に刺客に目を付けられ、拳口封じの目的で殺されたのである。

「遊興の場を移しただけで、結果としてまた被害者を増やしたのでしょう。全く、陛下が何をお考えになつていいのか見当も付きませんが。侯爵様のご懸念は尤もだと思いますわ」

玲彰はしばし考える様子を見せた。次いで彼女に視線を向ける。

「荷葉は陛下が嫌いなのだな」

「棲む世界が違えば、価値観も妾などには理解出来ないだけの事です」

本来ならば主は彼の寵愛を受ける后。貴人でしかも夫である。無礼だとお咎めを受けても訝しくはないのに、荷葉は容赦なかった。

「私も、あの時は何も出来なかったのだが」

「元々はお命を狙われていると知っていてぶらりと出かける陛下に問題があるのです。今回の事もそうでしょう。子供の許へ通えば、いずれはその子も命を脅かされるかもしれませんし。玲彰様は最善を尽くされています」

「命の危険か……そうだな」

主人への鼻^{ひしき}肩が幾分含まれているとはいえ、荷葉の言葉は民の言葉に近い。詳しい事情を知らぬ者は、楠王を陰で非難しているのを知っている。政治手腕はともかく、女が絡むと厄介な王だと。

「その子供はやはり、侍従官の勉強をおさせになるのですか？」

「とりあえずは部屋を与えて、色々な知識を習得させるつもりだ。本人の希望も聞くが、能力に拠っては研医殿で働かせたいとも考えている」

里岑^{りしん}。それが少年の名前だった。

漆黒の瞳を初めて見る世界に見開いて、呆然と声もない。

「此処が今日から、其方達の住まう家だ」

昼一刻頃に少年の家に遣いを出して、王都の中心部に近い侯爵邸まで連れて来る様命じた玲彰は、邸にて初めて彼と対面した。子供ながら立ち居振る舞いは落ち着いていて、凜とした雰囲気纏っている子供だった。

その里岑自体は、彼女の姿を目にするなり驚きに固まってしまっていたのだが。

「あ、あんた……人間、だよな」

「一応そうだが」

気を悪くするでもなく平然と答えて、玲彰は邸の中へと少年達を

案内する。

「綺麗な人だね。物語に出てくるお姫様みたい」

「ばか、本当のお姫様なんだぞ。こっしやく様の娘さんだってさ」

下の弟は八歳、妹は五歳だという。顔立ちは里岑によく似ていた。二人は兄の両脇からその手を握って寄り添い、彼を挟んで会話しているのが背後から聞こえる。

里岑自体は何も言わない。邸の入り口での驚き以降、仏頂面で黙々と歩いているだけだった。

華美を是としない箕浦の家風ではあったが、歴史の長い旧家の為邸内は重厚且つ格調高い設えとなっている。それなりに部屋数も多い。

客人向けの棟は木造ながらも天井が高く、部屋の扉が廊下の両脇に並んでいた。

「……一体、どこまで続くんだ」

廊下をしばらく歩いた頃、少年が低く呟いた。

「もうじきだ。そこで右に曲がると見えてくる」

答えながら玲彰が廊下の丁字に分かれた場所で右を選ぶと、更に並ぶ扉が視界に飛び込んで来た。内一番手前で足を止める。

鈍く光る把手に手を掛け、扉を開けた。

「うわあ……！」

声を上げたのは妹の方だった。兄の手を離して、室内へと駆け出

していく。

「おい！ 待てよ」

「ねえねえすごいよ！ このお部屋、家よりも広い！ 兄ちゃん達も早くおいでよ」

「本当だ。すげえなあ！」

弟も次いで中に飛び込んで行く。室内を走り回る子供達に玲彰は声を掛けた。

「此処は其方達の部屋だ。好きに使っていい」

「わあ、お姫様ありがとうございます！ ほらほら、これ寝台だよね？ 布団、すごく柔らかい」

「でも三つもあるぞ。もしかして、一人ひとりしてくれるのか？」

玲彰が「そうだ」と答えると、また歓声が上がった。

ふと背後を振り返る。里岑は扉近くから動かずにいたのだ。

「里岑？」

「……やめるよ、お前ら」

弟妹達と違い、彼は全く嬉しそうな顔をしていなかった。それどころか。

唇を噛み締めて、両手を拳に握り締めている。

「え？ どうしたの大兄ちゃん、そんな所に突っ立って」

「やめろって、言っているんだよ！」

悲鳴の様な怒鳴り声に、室内が一瞬にして静まり返った。

里岑はずかずかと室内に足を踏み入れる。二人の腕をそれぞれ引っ張って、扉へと踵を返した。

「痛い！ 嫌だあ。何すんだよ！」

「兄ちゃん、離して！」

「煩い！^{イライラ} いいから帰るんだ」

嫌だ、と泣き喚く子供達を彼は睨み付けた。今にも泣き出しそうな瞳で。次いで玲彰の方をそのまま見る。

「やっぱりこの話は受けられない。俺達は今まで通り暮らして行くから」

「それは困る」

まるで困った様に見える表情で、玲彰は言った。

「くれぐれもよろしくと、皓慧様から頼まれている。今日も直に此処に様子を見に来られるのだ。何かもし、気に入らない事でもあるなら言ってくれ。改善しよう」

「俺達は！」

開いたままの戸口に向かったまま、里岑は震える背中越しに声を荒げた。

「……俺達は、施しを受ける為に此処に来たわけじゃない」

知りたかったんだ、と力なく呟いた。

「姉ちゃんが惚れたお人はどんな世界に棲む人だったのか。姉ちゃんが何を思っていたのか、相手を知ればわかるかもしれないと思った。生活の事もあったから、働き口も世話してもらえんだと期待してた」

「ならば此処で働けば良かるう」

「世界が違い過ぎる。結局あんた達貴族は、自分勝手に奪うか与えるかしか出来ないんだ。相手がどれだけ惨めになるか、わかりもしないで」

棲む世界が違えば、価値観も妾などには理解出来ないだけの事です。

里岑と荷葉の言葉が、玲彰の記憶で重なった。

「……そんな理由か」

「何だつて!？」

玲彰は彼に歩み寄ると、まっすぐ瞳を覗き込んだ。

ものごころ付いた時から彼女を外界と遮断する白い世界は、少年の輪郭をもぼかしてしまう。

「世界が違って当たり前　惨めでも、その中で生きていくことは
思わないか」

この小さな者は、最早冷えた拒絶を武器にしようと言うのか。

他人が「見える」はずなのに。

里岑は怪訝そうに彼女を見上げたまま絶句している。鬼気迫る様子に圧されているらしかった。

「失礼致します、肅瑛お嬢様」

少年の背後、廊下に侍女が現れた。

「国王陛下がお見えでございます」

彼女が「通せ」と言わない内に、侍女の横から当の本人が苦笑を浮かべながら部屋に入って来た。

結

「肅瑛。私の役目を取らないでくれないか」

室内の凍りついた空気の中で、楠王だけが場違いにも思える朗らかさで笑う。

「皓慧様……」

たじろいた玲彰に構わず、彼は里岑の傍に立つと床に片膝を付いて本来王がやってはいけない事にも関わらず 視線を合わせた。

「里岑。私はお前に話さなくてはならない事がある」

少年は弟妹達の腕を掴んだまま、身体を扉に向け視線だけで応える。

「お前の姉、里峻は……私のせいで亡くなったのだ。だから世話をするのは当然なのだよ。施しなどではない」

小さな肩がぴくり、と動いた。

「皓慧様、お止めください！」

玲彰は常になく強い声を上げた。

まだ、言うてはいけない。里岑の為にも。

「……あんたのせいだ？」

楠王は妻の制止を聞き入れなかった。

「ああ。彼女は私の命を狙う者達に目を付けられた。家族を殺すと脅され、一味に手を貸したのだ。目的を果たせずに、口封じの為に殺されてしまった」

里岑は両手を離すと、目を見開いたまま楠王に向かって歩み寄った。一歩、二歩と。

正面に立つ。

「ころ……された？ 姉ちゃんか？」

楠王は頷いた。

「嘘だ……。あんたの家臣は、不慮の事故だって」

「本当だ。毒を盛られた」

未だ男にしては華奢なばかりの里岑の手。野良仕事に汚れ、どんなに洗っても爪の間には土が残っている。傷も多い。

その両手を、彼は国王の服に掛けた。

「嘘だ！！ 何で姉ちゃんが殺されなければならぬ！ 姉ちゃんが悪い事なんか何もするはずがないのに！！」

上質な布地に職人が技術の粋を集めて仕立てたと思われる服。襟首を躊躇いもなく、指を食い込ませて力任せに引っ張る。

「あんだ、姉ちゃんが狙われているって知っていたのか!? じゃあ何で止められなかったんだ」

「済まない……」

ただ謝るばかりの相手に、尚も少年は激情を募らせた。

「姉ちゃんは俺達の為に皐乃街に行ったんだ。いつも手紙には俺達を気遣うばかりで、自分の事なんていつも『大丈夫だから心配するな』って。その姉ちゃんがたった一度、書いたのがあんたの事だったのに!!」

楠王はされるがままに揺すぶられている。

「どうして黙っているんだ! 何とか言えよっ」

叫ぶ少年の瞳から涙が零れた。

号泣しながらも、無我夢中に腕を震う。

「返せ! 姉ちゃんを返せよ! 姉ちゃんをあんな街で たった一人で死なせるなんて……!」

泣き叫び、目の前の男を拳で小刻みに殴りつけ、また泣く。それの繰り返し。

彼の悲しみが伝染して、弟達も再び泣き出した。

楠王は子供達を見つめたまま、一言も声を発しない。

だからまだ早いと、止めたのに。

こんな悲嘆の場にあっても、玲彰は何処か違う場所から、冷静に

それらを観察していた。

歳よりも大人びていようと、きつと我慢していたのだろう。姉の代わりに、自分が家族を支えなくてはならないのだから。

「……私が憎いか」

楠王が問う。

ひとしきり暴れて泣き疲れたものか、少年は力なく床に崩れ落ちて更に小さく見えた。

それでもまだ、泣いている。息が喉に詰まって苦しげだった。

こんな場面を何処かで見た事がある、と思った。確か母が亡くなった時、隣で泣く妹の姿がやけに小さく見えたのに、自分は全く何も思わなくて

「優しさの欠片もない」と罵られた記憶。

「恨んでいい。お前の悲しみを肩代わりする資格は私にはない。……だから、憎しみならば甘んじて受けよう」

ああ成程、と玲彰は気づいた。

憎しみが鮮やかに浮かび上がれば、悲しみは変換される。

例えば悲しみを他に渡す事が出来なくとも、憎しみならば誰かにぶつけられるのだ。

だから皓慧様は傷付ける事をお選びになるのかもしれない。

「自分を責めるのは私だけで良い……」

あるかなきかの呟き。やはりと納得すると同時に、言い様のない息苦しさを感じた。

本当に、それでいいのだろうか？ 突き放されたままで？

思ったと同時に身体が動いていた。
近づいた妻の気配に楠王が振り返る。

「 肅瑛？」

彼女は里岑を抱き締めていた。

泣くのを忘れて、赤く潤んだ瞳が見開かれる。

一拍の呼吸を置いて、また泣き出した。今度は静かな嗚咽を以て。

「ねえ……ちゃん……っ……」

彼は手を伸ばさず。先ほどとは違い、腕ごと彼女の項うなじにしがみついた。

自分が何も感じられなくても、必要な事だつてあるかもしれない。

いつの間にか寄り添い共に泣いている兄弟を抱えながら、玲彰はただ静かにその背を撫で続けていた。

子供達の身体は暖かく、ほんの少し土の匂いがした。

穏やかな気持ちとはこういうものを指して言うのだろうか。

そう思つて見上げると かつてない程に 啞然とした夫の表情にかちあつた。

里岑は椅子に腰掛けて、小さな蠟燭の明かりをよすがに姉からの最後の手紙を読み直していた。

明日は国王が頼んだという貴族の邸に行く日だ。生活の面倒を見

てくれると言うが、世話というからには働き口が見つかるかもしれない。郊外の野良仕事ばかりやってきた自分が王都で働けるか不安だったが、食料もこないだもらったものだけになった。行くしかないだろう。

それにしても、と幾度も読み返して皺が増えた紙を見つめて訝しく思う。

一体姉は何故、自分にこれほど謝っているのだろう。

迷惑を掛けているのは里岑達の方だ。そういい働きも出来ない上に、幼い弟妹達は空腹を訴えてばかりいる。本来嫁に行くべき年齢を姉は遊郭で過ごし、自由を奪われ娘らしい幸せを何一つ手にする事が出来ない。一度だけこっそり覗きに行った極彩色の景色は、少年の目に毒々しく空恐ろしいとしか映らなかった。

あんな世界にいるというのに、姉は決して手紙に弱音を吐かない。元々強く優しい姉ではあったが、自分の環境を全く知らせて来ないのが常々心配だった。

それがこの手紙はどうだ。

思ひ人、つまり国王の事が半分を占めている。

手の届かない人を好きになってしまった。身請けをしてもらえない事になったけれども、里岑達とはまだしばらく一緒には暮らせないのが哀しい、と言う様な内容が綴られている。

彼は遊郭の仕組みは良くわからなかったが、知識を植えつけて来る近所の少年達の嫌がらせのせいで、身請けについては聞き知っていた。請け出された遊女は大抵その人の妾になるという。一緒に暮らせるのならば、手が届かないという文は訝しくはないか。

特に気になるのが、いつもと同じ身体を気遣う結びの言葉の直前に書かれたこの内容だ。

多くの花に埋もれてやがて飽きられてしまつぐらいなら、今のままの自分を決して忘れられない様に焼き付けてしまいたい。

そんな考えすら浮かんでしまう私は、きっと狡いのでしょうか。そ

して手を伸ばしさえすれば、この願いは叶ってしまうかもしれない。他の大切なものと引き換えに。

もしそうなってしまうたら

その時は自分勝手な姉だったと、どうか許して。

里岑。万に一つ私と会えなくなっても、どんなに辛い事があっても。

心を強く持つて生きてください。

きっと貴方なら、私の代わりに弟達を立派に育ててくれると信じています。

文章はそこで区切られていた。

「私と会えなくなっても」 最初に文を受け取った時はわからなかったが、今ならこれが恐らく遺書のつもりで書いたのではないかと想像がついた。

姉は自分の身に何かが起こると予感していたのかもしれない。

その『何か』の原因を里岑は知りたかった。

国王は事情を知っているみたいだった。聞けば教えてくれるだろうか。

自分を見る時の哀しげな眼差しの意味を、明日にでも聞いてみよう。

そう思い決めて明かりを消すと、彼は弟妹達が眠る小さな寝台に潜り込んだ。

「どうだ、里岑は元気でやっているか」

少年が箕浦邸に来て半月が経った頃、夜に西宮にやって来た楠王

は妻に尋ねた。

「暫くは意気消沈しておりましたが、今は気力を取り戻した様です。教師に学びながら、合間に邸の仕事を手伝う事になりました。家令の諫早いさはやの話では、中々の働き者だそうですよ」

そつか、と彼はまんざらでもない様子だ。心なしか上機嫌に見える。

お互いに多忙を極めていた為、妻と顔を合わせるのも久方振りだった。

「其方も随分と忙しいと聞くが、里岑の面倒まで見てもらって済まないな」

「いえ。賢い子供です。このまま教育していけば、いずれは必ず次代を担う人物に育てられるでしょう。今から楽しみですよ」

玲彰の表情はいつもと変わらない。にも関わらず、楠王は何か引つかかったらしく片眉を上げた。

「……珍しいな。其方の口からそんな言葉が出るなんて」

「研医殿は優秀な人材を求めています。王宮とは違い、身分の別がない。原石を手にするのは喜ばしい事ではありませんか」

さつきまでの上機嫌はどこへやら、楠王は不貞腐れた様に「里岑は其方に懐いているらしいしな」とぼやいた。

ああ、と彼女は事もなげに言う。

「何かの折にあの子が申しておりました。私は姉に秀囲気が似てい

るのだそうです。皓慧様もそう思われますか？」

何気ない様子の切り返しに、どういうわけか楠王は慌て始めた。

「い、いや。外見は全く似ていないし、中身だって私は全く逆だと思っぞ」

女の趣味が偏っているなどは認めたくなくて、何としても否定する事例を出そうとする。

何故私が慌てなければならんのだ。

葉山と違い、妻は何処か人として危うい。何を思っているのかほぼ予想が付かないし、付く時は大抵楠王が複雑な思いになる原因の場合が多い。例えば今の様に。

第一あちらはもっと色気があったと　それは賢明にも口に出さずに留めた。

「どうなさったんです？　何か変な質問でしたか」

「……いや。何でもない……」

結局自分は、意のままにならない女が好きなのだろうかと懨然とする。

立ち上がり、向かい合っていた妻の椅子に近寄る。脇に片膝を乗せ、両手を肘掛に付いて顔を覗き込んだ。

「子供に優しくするのも良いが、半月振りに会うのだ。……何か忘れていないか」

甘く囁く声に、玲彰はだがほんの少し考える様子を見せた。
やがて思い至ったとばかりに手を伸ばす。

「粛瑛」

物憂げに伏せた楠王の眼差しが、一瞬にして見開かれた。
子供をあやす様な、頭を撫でる手。

「……何だそれは」

「優しくしてみました。里岑はこうすると落ち着くそうです
中の方が良かったですか？」
背

「ふ！ ふざけるなっ」

子供じゃないんだから、そう続けようとして彼は言葉を失った。
妻の顔に、微笑みに似た表情が浮かんでいる。
初めて見る、玲彰の笑顔は非常にぎこちなくて。
恐らく自分でも笑っていると自覚していないのだろう。
それでも彼の心臓を止める程度の威力を充分持っていた。

「……いや、出来ればもう少し違う場所で……」

度し難いにも程がある。

恐らくこれが、「惚れた弱み」というものだろう。
ほんの少し口角を上げた風にしか見えない、そんな顔を眩しいと
感じるなんて。

魂を抜かれながらも、この喜ばしい変化がどうか里岑に拠るもの

ではないようにと

切に願う楠王だった。

了

結（後書き）

ここまでお読み頂き、ありがとうございます。

器用に見えて案外振り回されてしまう楠王と、複雑に見えて単純な玲彰の物語。いかがでしたでしょうか。

主人公以外の登場人物にも悲喜こもごも、が伝われば幸いです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7178q/>

霧の回廊 式

2011年5月28日18時05分発行